様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月２３日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００９　～　２０１２
課題番号：２１５２０３７６

研究課題名（和文）　明治の東京を描いた中国詩の集成

研究課題名（英文）　Collection of the Chinese poetry describing Tokyo in Meiji period

研究代表者
小川　恒男（OGAWA　TUNEO）
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：２０１８５５０７

研究成果の概要（和文）：
本研究は、日本を訪れた中国人が明治の東京を描いた作品群を研究対象とし、その集成を目的とした。具体的な研究成果として「郁曼陀『東京雑事詩』訳注」が挙げられる。郁曼陀は当時の市井の人々の目線で東京を描いており、取り分け女性の姿を好んで描写していた。彼は幕末から明治にかけて流行した日本漢詩を模倣しており、ある意味において、郁曼陀「東京雑事詩」は中国人でありながら日本漢詩を作るという試みであったという結論を得た。

研究成果の概要（英文）：
This study was studied poetry Chinese who visited Japan drew the Tokyo in Meiji period. Research results as concrete, some "Yu Mantuo(郁曼陀) "Dongjing Zashi Shi(東京雑事詩）" is. He painted Tokyo through the eyes of ordinary people of the Meiji era. It depicted in favor of the female figure in particular. He mimics the Japanese poetry that was popular during the Edo and Meiji. He tried that while being Chinese, to make Japan Chinese poetry.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	200,000	60,000	260,000
２０１０年度	200,000	60,000	260,000
２０１１年度	200,000	60,000	260,000
２０１２年度	300,000	90,000	390,000
年度			
総　計	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：中国文学
科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論
キーワード：中国古典詩・明治・東京・郁曼陀・東京雑事詩

１．研究開始当初の背景

明治期、多くの中国人が日本を訪れ、明治の日本を中国古典詩のスタイルで描いた。これらの作品の研究はまだ充分にはなされておらず、資料の整理さえできていない状態である。研究代表者は明治 10 年に来日し「日本雑事詩」200 首を作った黄遵憲に関する研究をに進めて、既にある程度の蓄積があったので、「日本雑事詩」から直接の影響を受けて作られたと思われる郁曼它の「東京雑事

詩」から研究に着手しようと考えた。郁曼陀は中国近代小説の草創期を支えた作家のひとりである郁達夫の実兄である。郁達夫自身も日本に留学しており、兄の曼陀の援助を受けている。その意味で、この研究は郁達夫研究にも資するところがあるだろうと予想した。

２．研究の目的

二千年以上の長きにわたり、中国古典詩は常に中国の文学の中心に位置するジャンルだった。しかし、20 世紀初頭の文学革命を迎えると、中国古典詩はその歴史的使命をほぼ終え、口語による小説や戯曲にその地位を譲らざるを得なかった。しかし、明治の東京を訪れた中国の知識人たちにとってみれば、自ら得た新しい知見やそこから発せられる様々な思いを託するに足る器としての機能をまだ完全には失っていなかったと言える。

彼らは初めて訪れた日本で、それまでの中国の知識人たちが見たことも聞いたこともない全く新しい題材を獲得することになった。それは大きく分けて次の二点に集約される。ひとつは、文明開化を急速に推し進めつつあった明治日本の姿である。それは日本を介在させた「西洋」との遭遇でもあった。清末の中国でも西洋化は焦眉の急を要する課題となっていたのであるから、明治日本の近代化を中国の人々に知らせることには大きな意味があったはずである。もうひとつは、「江戸」に象徴される日本古来の伝統文化である。「同文異種」「一衣帯水」の日本にも中国とは異なる独自の文化が存在するという事実が彼らには大きな驚きだった。中国に似ているようでどこか微妙に異なる日本の風俗や習慣を、中国古典詩の枠組みの中でどのように表現するか、それが彼らの創作意欲をかき立てる一要因となったと考えられる。

さらに、日清戦争後に急増する中国人日本留学生たちが、異国の地たる日本にあって、中国人アイデンティティをその根幹から問い直さなければならなかった点は、特に注目しなければならない。そこで、彼らの作品からはそれまでの伝統的な古典詩になかった新しい抒情を見出すことができる。

このように、この研究が対象とする作品群は、二つの面で境界線上に位置すると言える。一方では中国の古典文学と近代文学との境界線上に位置するということであり、毛一方では、中国の側から見れば、言わば辺境の地で作られた作品群であると言うことである。そのため、エアポケットのように見過ごされてきた領域である。

古き良き江戸と文明開化の東京とを中国の知識人たちが、古典詩の枠組みを維持しつつ、どのような意識を持ち、どのような表現をしたのかを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

まず、1905（明治 38）年に来日した郁曼陀の「東京雑事詩」七十三首の詳細な訳注を作成した。その際、彼が使用した語彙がどこから獲得されたかについては特に丹念な調査を必要とした。それは、郁曼陀が東京を描くに当たり、「絵葉書」「芝居」「蛍狩」「電話」「鉄道」などの和製漢語を利用した可能性を検討するためである。また、古典詩以外のジャンル、中国の詞や白話（口語）小説に用いられた語彙を利用した可能性も検討しなければならなかった。清末の白話小説には既に西洋の事物が描かれている場合があるからである。

次に、明治 10 年に来日した黄遵憲の「日本雑事詩」と比較しながら、両者の題材や表現の違いを読み解き、それぞれの詩人が抱え

た文学的な課題を明らかにした。郁曼陀が目にしたのは、黄遵憲から約 30 年後の東京だった。この間に、黄遵憲には見ることのできなかった様々な新しい事物が現れていた。また、黄遵憲が清国駐日公使の書記官として来日したのに対し、郁曼陀は一留学生であった過ぎず、社会的地位が異なるため、同じ東京で暮らしたにしても、極端に言えば、生活圏が異なっていた。郁曼陀は東京に暮らす市井の人々の視点から東京を描いたのである。これらの事実を前提に「東京雑事詩」の特徴を明らかにしようとした。

４．研究成果

研究成果として挙げることのできるものとして、郁曼陀「東京雑事詩」七十三首の詳細な訳注がある。上の「１．研究開始当初の背景」「２．研究の目的」でも言及したように、これまで充分な研究の蓄積がなかった領域なので、この訳注が今後の研究の基礎資料となることが期待できる。

作品の分析を通して、いくつかの点を明らかにすることができた。

郁曼陀「東京雑事詩」は黄遵憲「日本雑事詩」とは異なり、当時の市井の人々の目線で東京を描いており、取り分け女性の姿を好んで描写していた。黄遵憲の交友が明治政府の官僚や当時の漢学者たちに限定されていたのに対し、郁曼陀は日本の大学に留学してきただけに、東京に暮らす人々といっしょに道を歩き、お芝居に出掛け、新聞を読み、電車に乗った。そのため、「東京雑事詩」が描くのは市井の人々のありふれた生活であったり、政府高官のスキャンダルであったりする。特に着目しなければならないのは、「東京雑事詩」中の多くの作品が、日本で刊行されていた漢詩雑誌に投稿されたという点である。郁曼陀は当初は国費留学生だったのだが、途中から私費留学生になっており、投稿で得られる懸賞金が生活費になったのである。

語彙的には江戸末期から明治初年に刊行された漢文戯作文学、特に寺門静軒『江戸繁昌記』、成島柳北『柳橋新誌』の影響が大きかったことを明らかにすることができた。これら漢文戯作文学には中国近世白話語彙や和製漢語が多用されており、結果として郁曼陀は中国の近世白話語彙を多用しつつ、和製漢語を大胆に詩に取り込むことになったのだと考えられる。黄遵憲の『日本国志』『日本雑事詩』が『江戸繁昌記』からいくつかの記事を直接引用していることを明らかにすることができたのは、本研究の副産物である。

郁曼陀の「東京雑事詩」は好んで女性を描く。七十三首全体を見渡してみると、作中に女性の姿が現れる作が全体の三分の二弱ほどある。

まず、日々の生活の中で特に女性と関わりの深い事物、イブニングドレス、女学生、女性教師、女医などが題材として取り上げられる。「東京雑事詩」が外国竹枝詞の流れを汲む作品群であるからには、中国の人々にとってもの珍しく感じられた明治の東京の風物が題材となるのは、言わば当然のことだっただろう。一人の留学生として東京での日々を送る郁曼陀は、女性の著しい社会進出という当時の風潮を反映して、女学生や看護婦、女性教師、華族女学校、女子大学寄宿舎、女医など、働く女性、学ぶ女性を取り上げた。その一方で、雛祭り、黒焼き、生け花といった江戸以来の伝統な行事や慣習を描いている。「江戸」という地名に象徴される古いものと、「東京」に象徴される新しいものとの混在こそが郁曼陀の興味や関心を惹いたのではなかろうか。

また、艶書や廂髪、化粧、大売り出しなど、明治の東京を彩る最新の流行やファッショ

ンにも目を向けている。郁曼陀が描く女性たちは、宮中の女官たちの間で広く長い袖が流行れば、競ってその真似をしようとする。「小町紅」というブランド品の口紅を好み、「春衣大売出」の看板を目にすると「至る所に市を成す」。平成の女性たちとあまり異ならないごく当たり前の普通の女性たちである。「東京雑事詩」の魅力のひとつがここにあると思う。郁曼陀は東京の街を馬車に乗ってではなく自分の脚で歩き回ったに違いない。

さらに、芸者、三味線、元禄茶屋、置屋など色街に関わる題材が頻出することは、「東京雑事詩」の特徴の一つに数えられるだろう。留学生だった郁曼陀がどのような経済状態にあったか判然としないが、当時の漢詩雑誌に投稿して懸賞金を得ようとしたくらいであれば、それほど余裕があったとは考えられない。彼の色街を描く作品は『江戸繁昌記』『柳橋新誌』などを参考にして作られたのではないかと思う。この点についてはもう少し調査が必要だろう。

しかし、「東京雑事詩」は好んで女性を描く、と言った場合、さらに注目しなければならないのは、特に女性に限定されるわけでもないはずの題材を扱った詩であっても、女性を作中人物とすることが多い点である。例えば、其二は年賀状が題材なのだが、「飲到屠蘇一歳除、春華荳蔻十三余（屠蘇を飲み到る一歳の除、春華　荳蔻　十三の余）」とお屠蘇のために頬を少し赤らめている十三、四歳の少女を登場させる。其十五は仏寺を題材とするが、「僧家十五盈盈女、夜傍龕灯作嫁衣（僧家　十五　盈盈たる女、夜　龕灯に傍ひて嫁衣を作る）」のように、結婚を眼の前に花嫁衣装を夜なべしながら自らの手で縫っている十五歳の少女を描く。

全体的に郁曼陀は幕末から明治にかけて流行した日本漢詩壇の作風を模倣しており、ある意味において、郁曼陀「東京雑事詩」は中国人でありながら日本漢詩を作るという試みであって、黄遵憲「日本雑事詩」とはその点が大きく異なるという結論を得た。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

1. 小川恒男, 明治の東京を描いた中国詩の集成, 科学研究費基盤研究（C）研究報告書, 査読無し, 2012, p1～130

2. 小川恒男, 郁曼它の「東京雑事詩」について, 比較日本文化学研究, 3 号, 査読無し, 2010, pp174～185

3. 小川恒男, 明治の東京を描いた詩（一）, 中国中世文学研究, 55 号, 査読有り, 2009, pp47～56

〔学会発表〕（計０件）

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

小川　恒男（OGAWA　TUNEO）

広島大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：２０１８５５０７

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：